

まぼろし さいしやう うがきかずなり
幻の宰相・宇垣一成

竹村紘一

慶応4年6月21日（1868年8月9日）～昭和31年（1956年）4月30日

軍部独走を抑える期待の星

大正末期から昭和初期にかけて長州出身者に代わって陸軍の実権を握り、宇垣閥と称される一大勢力を築いた。陸軍大臣として宇垣軍縮を断行した他、陸軍中堅幹部等が画策し宇垣ら陸軍首脳も関与していたクーデター未遂事件（三ヶ月事件）が発覚した。クーデター後の首相就任が予定されていた宇垣は、陸軍省の中でも永田鉄山や岡村寧次らが計画に反対し、二月に予行された大衆動員の成果が小規模だったことなどからクーデター推進の主力であった桜会の中でも反対者が出て、消極姿勢に転じ計画を中止させた。合法的に政権が取れると判断したからでもあつ

たという。宇垣は軍人でありながら政治家的な要素も多分にあつた人物であつたと思われる。

宇垣は、毀誉褒貶も多いが、根柢の無い批判も多い。大勢としては、各方面との交流があり視野が広く先見の明あり、高邁な識見を有し、勇敢で勘も鋭く、実行力もある人物で、近づいて来る人間には常に胸襟を開き、進んで人材を求め、努力を惜しまぬ面を有する。当代屈指の人物との定評があつた。陸軍の実力長老として、独断専横の陸軍を抑え、支那事変を解決し、対米戦争を回避できる実力者として、期待を集め、幾度も首班候補に挙げられた人物で世に「惑星の人」とも称された。

宇垣は陸軍大臣を長く務め、陸軍の四個師団削減と軍備近代化を成し遂げた。昭和五年、ロンドン軍縮会議が開かれた時には、閣僚

の一人として、海軍軍縮条約の批准を促進した。しかし軍部は統帥権干犯を唱えて政府に反発し、テロが頻発するようになる。中でも陸軍皇道派の一部が蹶起し重臣等を殺害した二・二六事件は、全国を震撼させた。事件後、陸軍では統制派が主導権を握り肅軍を進めるが、軍の政治関与は改まらぬため実効は上がらず、その後の内閣は、陸軍との関係を如何にするかが最重要課題となつて行くのである。

首班への大命降下と大命拝辞

昭和十二年一月、陸軍との軋轢で広田内閣総辞職後、元老西園寺の推薦により宇垣に組閣の大命降下。陸軍の大物でありながら軍部ファシズムの流れに批判的であり、また中国や英米などの外国にも穏健な姿勢を取る宇垣の首班登場は、世評も高かった。宇垣は、中国との紛争の早期解決を喫緊の重要事項と考えていた。ところが、陸軍では宇垣軍縮や三月事件における宇垣の対応に反感を持つ石原莞爾ら反宇垣派が画策して、陸軍の総意として宇垣反対を取り纏めた。広田内閣の時に復

活した軍部大臣現役武官制を利用して、陸軍が陸軍大臣を出さぬため、宇垣は組閣が出来ず、大命拝辞に追い込まれた。大正デモクラシーのさなかの第一次山本内閣において、軍部大臣現役武官制を予備役に拡大した時に、もつとも強硬に反対し、陸軍首脳部を突き上げたのが当時陸軍省の課長だった宇垣であり、皮肉にも広田内閣の時に復活したその現役武官制により組閣断念に追い込まれたのである。もし予備役でも陸相になることが可能であれば、宇垣自身が陸相を兼任すれば宇垣内閣が発足出来た。

しかし、宇垣は最後まで組閣を断念せず、大権発動の奏請を決意、湯浅倉平内大臣に「陸軍の現状は国家の将来に重大な過誤を招く兆候を孕んでいる。その邪道を是正せんとする私に下された大命を阻止することは、大権干犯であり違勅である。軍の横暴で組閣不能の悪例を残してはならぬ。どうか寺内に後任陸相を出せとの勅命か、または、陛下から宇垣へ特旨を以つて現役に列するとの御沙汰を賜りたい。さすれば、不肖、宇垣、総理と陸相を兼務して組閣完了致

しますと条理を尽くして懇請したが、湯浅は無理をすると流血の惨事を引き起こしかねないとして断念するよう答えた。

宇垣は尚も、「陸軍の好む者を総理に推したならば、日本は山嶺から直下する巨岩の如く奈落への転落は必至である。光輝ある我が国興亡の岐路に立つ今こそ、救国の初一念即最後の覚悟である」と訴えたが、湯浅は「これ以上、陛下をお煩わしすることは出来ない」と逃げたため、万事休したのであった。湯浅は軍部や政党と一定の距離を置く穏健派で謹厳実直な人柄が評価され、宮中の良識派と見做され天皇からの信頼も厚かったというが、やはり、勇氣に欠けていたのであろうか、はたまた、信念であったのであろうか。いずれにせよ、これが、運命の分かれ目となったのである。この時、宇垣内閣が成立していたら、日本の進路は変わっていたであろうと多くの世人が指摘するところである。後に、石原莞爾は宇垣の組閣を流産させたこの時の自分の行動を人生最大級の間違いとして反省している。石原の反省は、宇垣の組閣流産の後の政治の流れが、石原

が最も嫌う日本と中国の全面戦争、石原が時期尚早と考えていた対米戦争への突入へと動いていたことによるもので、石原は宇垣の力をもつてすれば、この流れを変えていたようである。宇垣と石原が手を組めば陸軍の独走を食い止め太平洋戦争が回避出来た可能性も高いと思われるのである。

陸軍に振り回される近衛内閣

昭和十二年、廬溝橋事件が勃発、紛争は長期化した。昭和十三年一月に近衛首相は、「爾後、国民政府を対手とせず」という第一次近衛声明を出した。これを憂い、難局打開を考えていた宇垣は、昭和十三年五月、近衛の懇請を容れて近衛内閣の外務大臣に就任した。宇垣は支那事変の解決に情熱を燃やし、国民政府の行政院長孔祥熙（こうしょうき）との和平会談を進める方針を決めた。

ところが、九月に入り、近衛が「蒋介石を相手とせず」という帝国民政府の方針は終始一貫不変である」との声明を出した。これは、宇垣の和平交渉を破綻させるものであった。また、軍部と外務省の

一部は宇垣が進める和平交渉に反対し、支那事変処理事務を外務省から別に移すために、興亜院を設立することを提案し、近衛はこれにも賛成したのである。軟弱な近衛の、二階に上げて梯子を外す裏切りにも似た行為に激怒した宇垣は、「事変の解決を自分に任せると言っておきながら、今に至って私の権限を削ぐような内閣に留まり得ない」として外相を辞任した。

わが国は支那事変の解決の機会を失い、反宇垣派が主導する陸軍は暴走を続け、わが国を危険な方向へ誤導することになったのである。宇垣が国民政府から引き出した条件は後の日米交渉に比べてはるかに有利なものであるのはもちろん、交渉ルートが確実に国民政府中枢と通じた「筋の良い」ものであったこと、相互の信頼関係の存在などから、その後様々な形で行われた日中和平の試みのなかでも最も実現性が高く貴重なものであったとの評価もある。満州事変以来の日本外交を厳しく批判していた外交評論家の清沢冽は宇垣外交を高く評価、「日本は久々に外交を持った。外交官ではない人物によつて」と評したとされる。

戦後の宇垣

東京裁判が行われ、戦勝国によつてわが国の多くの指導者が裁かれた。昭和二十三年十月、判決を前に裁判が休止されていた時、首席検事ジョセフ・キーナンは、宇垣をティール・パーテイに招いた。他に岡田啓介・米内光政・若槻礼次郎の三名が呼ばれ、キーナンは「日本における真の平和愛好者はあなた方四人である」と述べた。

宇垣は、昭和二十八年の参議院選挙に全国区で立候補し、五十一万票を超える驚異的な大量得票を得て最高点で当選した。国民の間にも宇垣への期待があつた証左である。しかしながら、遅すぎたのである。あまりにも老齢であり、在職中に病死したため、活躍場面はなかった。自他ともに認める首相候補であり、内閣流産後も幾度となく候補として名前が挙がったが、結局首相になれず候補のままで他界したことから「政界の惑星」と呼ばれるようになった。惑星は太陽（Ⅱ首相）のまわりを回り続けるが、太陽（Ⅱ首相）にはなれなかつた意味である。議会主義を尊重していたことなどから大物軍人としては珍しく政党政治家グル

トブにも人気があり、戦前は民政
党総裁に、戦後直後には日本進歩
党総裁に推されたことがあったが、
これらも実現をみることはなかつ
た。期待の人、幻の宰相、惑星の
人、宇垣は、三十一年四月没。享
年八十七歳。

- 『宇垣一成日記』3巻』
(角田順・校訂 みすず書房
1968年〜1971年)
- 『秘録宇垣一成』(額田坦・
著 芙蓉書房 1973年)
- 『宇垣一成』(井上清・著 朝
日新聞社 1975年)
- 『宇垣一成 悲運の将軍』
(棟田博・著 光人社 197
9年)
- 『陸軍に裏切られた陸軍大
将 宇垣一成伝』(額田坦・
著 芙蓉書房 1986年)
- 『宇垣一成―政軍関係の確
執』(渡辺行男・著 中公新
書 1993年)
- 『宇垣一成とその時代―大
正・昭和前期の軍部・政党・
官僚』(堀真清・編著 新評
論 1999年)